

Book Review



TCH のコントロールで治す 顎関節症

木野孔司 編著



Reviewer

浅野正樹 Masaki Asano

(東京都・あすか歯科クリニック/東京医科歯科大学歯科同窓会会長)

A4 判変, 72 頁
定価 (本体 5,600 円+税)
医歯薬出版刊



今まで数多くの顎関節症に関する書物が出版されたが、本書はそれらとは全く異なったアプローチで書かれている。つまり、TCH (Tooth Contacting Habit)と言われる習癖が顎関節症のみならず口腔内のさまざまな問題の増悪因子になっているという考え方である。

本書は、3章に分かれている。第1章は「TCHを知る・見つける・コントロールする」、第2章は「TCHのコントロールを取り入れた顎関節治療」、第3章は「臨床例」となっている。第1章の中で筆者らは、TCHとは「非機能時に上下歯列を接触させている癖」としているが、一般的に口唇閉鎖した状態で常に歯列接触させている患者は、「口を閉じたときに、上下の歯が触っているのが当たり前」というように考えていると述べている。

TCHの見つけ方、コントロール法についての詳述は避けるが、写真などを使ってとても分かりやすく説明されていて、特に難しい技術は必要なく臨

床家にはとても受け入れやすい内容となっている。

第2章では、長年にわたり顎関節症の原因は咬合の不良にあると考えられてきたが、1970年代から多因子病因説が提案され咬合要因のみならずその他の多くの要因が関与しているとの認識が広まった、と説明され、筆者らはそれらの要因を寄与因子と呼び、それらの寄与因子がタイミング良く積み重なり、その全体の病因強度が耐久力を超えると発症し、その状態が維持されれば症状も続くと考え、「積み木モデル」と称して患者の説明に使用した。

顎関節症の治療には、「たとえ効果が小さくなくとも可逆的な治療手段を用いるべきで、不可逆的な方法は極力避けるべき」という考えに則れば、治療対象となるのは、精神的要因と行動要因ということになるわけだが、両要因のなかのどの寄与因子が顎関節症の発症、症状の維持、永続化に関与しているかを調べたところ、「片咬み癖」

64.8%、「不良姿勢」59.8%、「多忙な仕事」57.7%、「TCH」50.4%であり、現在では70%の有痛性顎関節症患者にTCHの保有が認められるとしている。

このように顎関節症の原因は、今までの咬合論に由来するという考えでなく、さまざまな寄与因子がかかわり、なかでもTCHという新しい考え方が関与しているという発見を記述したこの本は、必読に値すると思う。また、第2章の後半では、顎関節症の診査・診断や顎関節症の治療として運動療法などが述べられており、とても分かりやすい内容となっている。

巻末には、顎関節症患者に対する質問表、診査表、そしてTCH是正シートが付けられているのはありがたい。

本書は、顎関節症に取り組んできたがなかなか思うような成果を得られなかった臨床家に、まさに「一筋の光明」を与えてくれた。本書を熟読していただき、ぜひ明日からの臨床に役立てていただきたい。